

研究結果の概要

【研究課題名】

高次脳機能障害者の診断・リハビリ・社会復帰促進パスの策定（150502-02）

【研究実施者】

村井俊哉（研究代表者：京都大学大学院医学研究科 精神医学 教授）

以下 研究分担者

種村留美 神戸大学大学院保健学研究科リハビリテーション科学領域運動機能障害学分野・作業療法学 教授

武澤信夫 京都府立医科大学神経内科 学内講師

古川壽亮 京都大学大学院医学研究科・健康増進行動学 教授

上田敬太 京都大学医学部附属病院 精神科神経科 助教

【背景】

平成 13 年度から行われた実態調査によって、高次脳機能障害の中心となる認知機能障害が、注意障害、記憶障害、遂行機能障害、社会的行動障害であることが判明し、以後高次脳機能障害という用語が徐々に人口に膾炙しつつある。しかしながら、このような認知機能障害が、どのような脳損傷あるいはネットワーク損傷に伴って後遺症として生じやすいのか、どのような形で社会参加に影響をあたえるのか、といったことはまだよくわかっていない。急性期のどのような所見が後遺症につながりやすいかについても理解が広がっておらず、臨床場面では、慢性期の臨床現場と急性期の臨床現場の間での情報共有がなかなか行われていない。

【目的】

本研究では、急性期から慢性期、あるいは逆に慢性期から急性期への情報提供を行えるように、社会復帰までを見通したクリニカルパスを作成することを最終目的とし、そのためにまず、①社会復帰に寄与するリハビリテーション・代用手段の獲得（担当：神戸大学：種村）②高次脳機能障害者の社会復帰の現状の把握（担当：京都府立医科大学：武澤）③慢性期の症候学的検討とその脳内基盤の探索（担当：京都大学：上田）を行った。なお、分担研究者の古川は、各研究に対する医療統計学的な助言を主に担当している。

【研究方法】

1 就労支援の現状と支援方法

京都府下で利用されている脳卒中クリニカルパスを利用し、脳卒中症例における高次脳

機能障害の有病率、および予後についてデータを収集し検討を行った。脳卒中パスは、インターネット上のサーバに蓄積される脳卒中症例の匿名化されたデータであり、現在急性期病院から回復期リハビリテーション病院への転院の際に、実地的に利用されているものである。

2 就労版「あらた」の改変

高次脳機能障害の支援アプリケーションである「あらた」の就労版の開発を目標に、まずは現行版を作為割り付けし、利用者・非利用者で比較することで効果判定を行う。また就労支援施設職員へのアンケートも同時に行い、就労版作成の意見収集を行う。

3 症候学的特徴とその神経基盤の探索

慢性期の高次脳機能障害者を対象に、社会認知機能を含めた認知機能検査、QOLを含めた行動評価、睡眠、易疲労性などの身体的特徴の評価を行い、3 TMRI で撮像した脳画像と比較検討することで、障害の神経基盤を探索する。また、脳萎縮に関連があると推定されているアミロイド蛋白について、PET を用いて検討を行った。

【研究成果】

平成 28 年度においては主に次の三つの点が明らかになった。

- ・脳卒中症例における高次脳機能障害の重要性
脳卒中症例のうち、高次脳機能障害を有する症例は、介護保険の取得率が高く、就労に結びつきにくいことが判明した。
- ・Information and Communication Technology (ICT) ツールの有効性
ICT ツールの使用が、自己効力感の上昇に繋がることが示唆された。
- ・び慢性軸索損傷における脳幹体積の低下と、急性期の意識障害との関連。
健常者と比較し、脳幹体積、特に中脳などの体積が低下しており、急性期の意識障害の指標である GCS あるいは外傷後健忘期間との有意な相関を示した。

【今後の展望】

平成 29 年度以降については、次のようなことを予定している。まず、今年度に得られた脳卒中クリニカルパスのデータについて、さらに詳細に検討を行い、就労に影響する因子をより詳細に検討し、得られた知見について、脳卒中以外の疾患についても確認を行う。「あらた」の活用については、アンケート調査の結果から就労版の開発を行い、試験的な使用を開始する。また、症候学とその神経基盤については、引き続き症例の蓄積を行うとともに、外傷性脳損傷以外の疾患にも拡張し、検討を行う。アミロイド PET についても、症例を蓄積し、アミロイドの蓄積と、MRI 構造画像の関連についても検討を行う。